

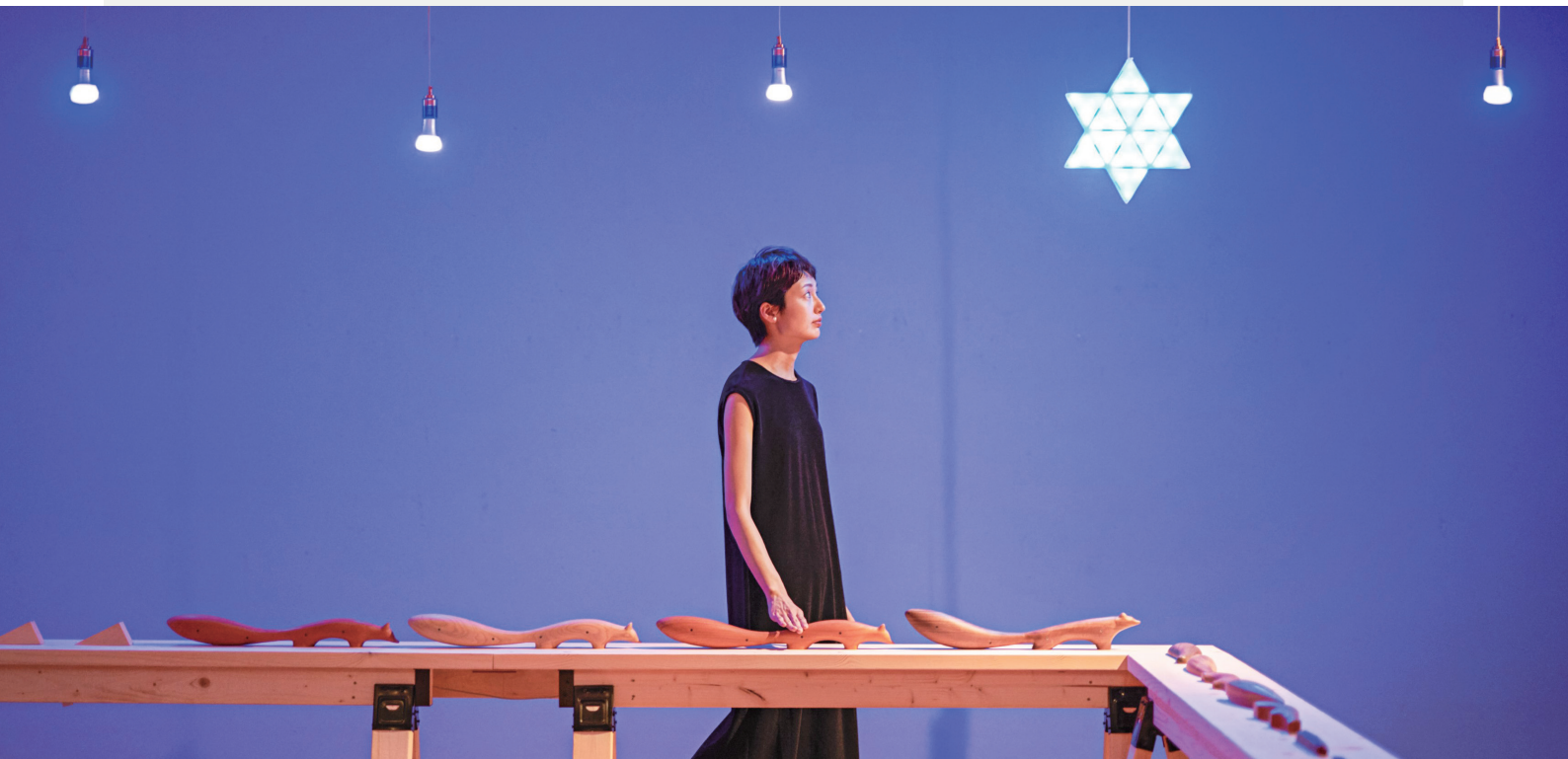
RISHO

Yosano Akiko Museum

学芸WEB通信 No.2

SAKAI
RISHO
NO
MORI

さかい利晶の杜
Sakai Plaza of Rikyu and Akiko



《うつしおみ》2019 写真: Kenji Kagawa

《うつしおみ》

アートユニットMATHRAX（マ
スラックス）の表現世界は魅力に溢れ
ています。各地の展覧会では、その引き
出しからユニークでチャーミングな宝
物がとりだされ、鑑賞者を魅了しまし
た。さかい利晶の杜の企画展会場には、
かつて2019年に神奈川県茅ヶ崎市
美術館、2022年に豊中市立文化芸
術センターで展示された《うつしおみ》
が出現、MATHRAXの表現世界を
展開します。

《うつしおみ》は、いまここに生きて
いる人を指す現身うしみをもとに、それに従
う臣うぢが一体となって推し進んでいく姿
を表現したものです。MATHRAX
の作品のなかでもリズムと変化と時の
経過を顕著に感じることが出来るもの
です。全体と個、主と従、本体と補助輪
など時には主従がさかさかになりなが
ら、相互が補い合って進んでいく姿は、
まさしく現実をたくましく生き抜くエ
ネルギーに溢れた生命体そのもので
す。《うつしおみ》に向き合った鑑賞者
は、時の経過による変化の美を感じと
り「さび」の世界と共通した何かを得る
かもしれません。

歴史と文化の町である堺に現れた
《うつしおみ》。そのみずみずしい生命
力に溢れた魅力をぜひとも会場で味わ
ってください。

（堺市博物館学芸員 矢内一磨）

目次

- 2 | 企画展レポート | 堺とMATHRAXをつなぐから
- 3 | 企画展レポート2 | MATHRAXと茶の湯をつなぐ風
- 4 | コラム | 所蔵品紹介
田辺宗一和尚墨蹟「酬恩」
- | コラム | さかい百景 #02
海会寺金龍井
- | ちょっと一息 | みて！みて！利晶のここ
アテンダントスタッフ

■ 企画展「茶の湯に吹く風 みる・きく・ふれる現代アート」

[会 期] 2023年7月8日(土)～8月27日(日)
※7月18日、8月15日は休館日となります
[時 間] 9時～18時(最終入館17時30分)
[会 場] 企画展示室・「さかい待庵・無一庵」内・他
[観 覧 料] 大人 300円、高校生 200円、中学生以下無料
[主 催] さかい利晶の杜
[協 力] 花王株式会社、陶芸家・屋馬和代、阪堺電気軌道株式会社
[企画協力] 堺市博物館

今回《うつしおみ》を展示するにあたり、花王株式会社感覚科学研究所のご協力の
のもと、茶の湯をテーマにした3つの香り(風・玄・妙)を調合いただきました。

企画展レポート

堺とMATHRAXをつなぐかけら

四月のある日。リサーチのために堺に訪れていたMATHRAXのお二人と、堺陶芸会の昼馬和代さんの工房にうかがいました。堺陶芸会では、堺の陶芸家たちが「堺の土で・堺で焼いた「堺焼」を制作されており、その作品は利晶の杜の立礼呈茶席でも実際にお出ししています。

工房に到着するとさっそく、事前にワークショップで使用したいと相談していたお茶碗の陶片を分けていただきました。焼き方、釉薬の種類など組み合わせは様々です。



「10個作って、納得できるのは1個あればいいほうですよ」
(昼馬和代さん)

茶の湯の道具で最も重要なお茶碗づくりについて、お互いのこれまでのお仕事を紹介しながら、お話を伺いました。

「陶芸の先生からは、自分のお茶碗を作ることをなかなか許してもらえませんでした。（それくらい難しい）」と昼馬さん。昔、先生

に良いお茶碗とは何かを尋ねたときに「海原のような茶碗」だとおっしゃっていたことが印象に残っているそうです。

当時、MATHRAXのお二人は、「利休から続く現代の侘び寂び」をテーマに新作を検討していました。

「茶室でのお点前では、客人のふれるお茶碗が、亭主の世界観を現す重要な要素だと感じます。」と坂本さん。千利休は当時、井戸茶碗に「侘び」の精神を感じとり、侘び茶のための樂茶碗を作りました。では、現代の「侘び」のお茶碗はどんな表現になるのでしょうか。

「現代では、装飾的だったり、重さのあるお茶碗を自分の表現として発表する作家もいますが、お茶席ではやはり、お茶を差し上げるのが最終目標であって、そのためのお茶碗がよい茶碗と言われますよね。」と昼馬さん。これまで、実用的なものよりも造形的な陶芸作品を制作されていることから、芸術的な表現に共感しつつも、その創作の先にある「ひと」を大切にされていることが垣間見えるお話でした。

(さかい利晶の杜運営グループ 本展担当

山本真理奈)



左から、陶芸家の昼馬和代さん、MATHRAXの坂本さんと久世さん



茶碗 作: 昼馬和代
井戸茶碗(黎明)、黒樂茶碗(黄昏)、現代茶碗(新風)

新作《吟風》 ざんぷう

唐の詩人・寒山が詠んだ「寒山詩」から引用された禅語「吟風」様松(風に吟ず一様の松)から名付けられました。「風は誰にでも吹いて、一様にそれぞれの歌を歌わせてくれる」という意味が込められています。

今回の展示では、復元茶室「さかい待庵」をご案内した後に、茶庭を望む廊下に置かれた作品をご覧ください。

茶碗が見出された時代を象徴する「井戸茶碗」、利休の侘茶の精神を体現した「黒樂茶碗」、そして、現代における侘び寂びを表現した「現代茶碗」、三つの茶碗にふれることでそれぞれの音が奏でられます。音につつまれながら、三碗ひとつひとつの色や形を感じることで、茶の湯の歴史に想いを馳せていただければ幸いです。

茶の湯とアートとの関係性は、これまでも多くのアーティストによって横断的な試みがなされてきました。新しい表現による茶室や、茶会をパフォーマンスの場として捉えるなど、茶の湯の普遍的な精神性は時代や場所を超えて広く受容されています。

MATHRAXは、電気、光、香り、石や木などの自然物を用いたオブジェやインスタレーションの制作を行う久世祥三と坂本茉莉子によるアートユニットです。それらの作品は、鑑賞者がオブジェに触れることで音や香りが展開していき、環境そのものが作品体験として立ちあがります。作品と鑑賞者の関係性が欠かせない要素となっていることが特徴です。

この鑑賞体験のあり様は、茶席での体験―湯の沸く音を聞き、ふくよかな茶の香り

につつまれながら、亭主がその日のために選んだ道具を客が拝見する―を通して主客が心を通わせる「一座建立」のひとつに似ています。茶の湯においても、亭主と客があつてこそ茶席は成り立つのであり、それゆえ茶室の中では主客は対等であることが求められます。

MATHRAXが自身の作品と茶の湯に特別に関連を見出したのは、「触れる」という行為です。お点前においては茶を点てる前、これから使う道具を帛紗ひくさで拭い清めるという所作があります。すでに清潔な道具をあらためて客の前で清めることは、自身を清め、一服の茶によって相手をもてなすための祈りの姿のようです。

コロナ禍では、何かが触れ合うことは清める／汚れるどちらの状態をも過度に際立たせる行為となりまし

力強さを感じます。

また、触れることを前提とした作品は、体験を生み出すことと同時に、物質としての劣化や破損の可能性と隣り合わせです。しかし茶の湯においては、どんな高価な道具でも茶会で使われることがなければその価値が後世に残ることはなく、特に侘茶では時代を経た道具に美を見出します。聖俗にとられないあり方も、両者に共通しているのではないのでしょうか。

当館が建つ宿院周辺はいつも、海からの風が吹く場所です。風は気温や気圧の高低差のあるところとうまれますが、本タイトルにもふさわしく、伝統的な文化を紹介するさかい利品の杜でMATHRAXの作品を展示することそのものが、風が吹く条件と重なるように感じます。

《風と石》《吟風》など、作品には風のイメージが通底しています。「風」はこの世の移り変わり、「寂び」の概念を意味する言葉でもあります。「松風」―茶の湯では釜の湯が沸く音を連想しますが、禅語においては、坐して静かに耳をすまます様子にもつながります。風の音を静かに聴くような気持ちで、作品の声に耳を澄ませてみてください。

たせる行為となりまし
た。その大本には、人々が
目に見えないものを恐れる
気持ちが見えたりいま
す。そんな時代を経た《う
つしおみ》には、目の不自
由な人と盲導犬との信頼
関係を作品に落としこん
だというエピソードから
も、手の感覚を頼りに世
界を把握していく人々の

(さかい利品の杜運営グループ 本展担当
山本真理奈)



デザイン: Chiaki Kuwata

企画展アーティスト MATHRAX (マスラックス)

久世祥三と坂本茉莉子によるアートユニット。デジタルデータと人の知覚との間に生まれる現象に注目しながら、人が他者と新たなコミュニケーションを創り出すプロセスについて探求する作品を制作している。



写真: Kenji Kagawa

■ 個展

- 2022 とよなかアーツプロジェクト メディアアート企画「光さす間に」 豊中市立文化芸術センター
- 2021 とよなかアーツプロジェクト メディアアート企画「いしのこえ」 豊中市立文化芸術センター
- 2020 「ふれて すすむまへへ -音と光と香りとともに」 茅ヶ崎市美術館
- 2019 「指先の中の音たち」 アートギャラリーミヤウチ
- 2018 「いしのこえ」 茅ヶ崎市美術館
- 2016 「じぶんのまわり -耳でながめて 目でかいで 鼻でふれて 手できいて- 展」 茅ヶ崎市美術館

■ グループ展

- 2021 東京 2020 NIPPON フェスティバル
「ONE -Our New Episode- Presented by Japan Airlines」
Our Glorious Future ~KANAGAWA 2021~ カガヤク ミライ ガミエル カナガワ
- 2020 「科学と芸術の丘 2020」
- 2020 「六甲ミーツ・アート芸術散歩2020」
- 2019 「ここから4 -障害・表現・共生を考える5日間」 国立新美術館
- 2019 「美術館まで(から)つづく道」 茅ヶ崎市美術館

所蔵品紹介

田辺宗一和尚墨蹟「酬恩」

「酬恩」

一休山主宗一印

表装 中島表具店 中島国雄
裂地

一文字 唐草金襴
中廻し 利休パ
天地 新遠州

軸先 木地黒漆塗

酬恩は、中世堺ゆかりの禅僧一休宗純(一二三九四〜一四八二)の言葉です。一休の墓がある京田辺市薪の酬恩庵一休寺の田辺宗一住職が揮毫されました。
一休の七代前の師に当たたる大応国師



酬恩(堺市蔵)

南浦紹明(一二三五〜一三〇九)が正応

年間に開いた妙勝寺が荒廃していたのを嘆き、一休は一四五六年に草庵を結んで中興、南浦の恩に酬いるため、開いた庵に「酬恩」と名付けました。奔放に生きたとされる一休和尚でしたが、自らを生み出した先人の恩に酬いることを忘れませんでした。

また南浦紹明は、宋から茶台子、風炉、釜などの茶道具一式と茶書七部を持ちかえり、茶礼と闘茶を始めたといわれています。日本における草庵式茶道の創立者として尊敬されており、日本の茶の湯の歴史にとって、大切な人物のひとつです。

(堺市博物館学芸員 矢内一磨)

さかい百景 #02

堺ゆかりの歴史や文化、芸術にまつわる
とっておきのスポットを紹介します。

海会寺金龍井(かいえじきんりゅうせい)

茶の湯には優れた茶葉と清らかな良い水が必要です。良い水はる過能力がある丘陵部や山の周辺部で得られます。堺は泉北丘陵と上町台地のつなぎ目にあたります。地形的に良い水を得ることができ、恵まれた場所であり、名水を産してきました。

ここで紹介する海会寺金龍井は堺南荘の氏神である開口神社の西の門脇にある井戸です。

海会寺は、正慶元(一三三二)年に東福寺派の禅僧乾峯士曇が開山しました。乾峯が干ばつに際して龍神に祈ったところ、老人に化身した鬼面龍神が井戸を掘る場所を教えたという由緒があります。大坂夏の陣の前には海会寺はこの地にあり、江戸時代初期に南宗寺境内に移された後も「カイエジノマエ」の地名と海会寺金龍井は長く残っていました。この井戸について室町時代の記録には「泉南第一の井戸」と記されています。泉南とは、当時のことばで堺を指します。江戸時代の記録には、豆腐製造や茶の湯に適した名水を産すると書かれています。

しかしながら、周辺の開発の進行により、水質も変化していきました。平成一六年に大小路界限「夢」倶楽部により井戸周辺の整備がされ、金龍井の水を得ることができるようになりました。

(千利休茶の湯館学芸員 五福伊八郎)



金龍井正面



文化財説明板

さかい利品の杜スタッフの「推し」/



施設担当者

みて！みて！利品のここ アテンダントスタッフ

来館者が最初に出会うスタッフ、それがアテンダントです。揃いの制服を着用し、来館受付、観光・館内案内、展示の監視業務、お土産の販売と多岐にわたる業務に携わり、お客様と接する仕事について聞きました。

- 来館者と接するうえで、心がけていることは？
お客様が最初に出会うスタッフですので、姿勢を伸ばして、笑顔で分かりやすい発声を心がけています。毎朝、発声や接遇のトレーニングを行っています。現在は新型コロナウイルス感染症対策でマスクを着用していますので、アイコンタクトも心がけています。またアテンダント同士の情報共有も大切にしています。
- アテンダント業務のなかで、嬉しかったことや良かったことはありますか？
お客様に対応をほめられると嬉しいですね！質問にきちんと答えられて、感謝の言葉を頂戴すると本当に嬉しいです。さまざまな来館者の方と接することで、日々の悩み事やストレスも忘れることができ、また頑張ろうと思えます。
- 仕事をするうえで、大切にしていることはありますか？
どんな仕事でも一生懸命やる。そのなかで楽しいことを見つける。表面だけでなく、深く見ることが大切だと思います。

編集後記

「学芸WEB通信 RISHO」第2号をお届けします。紙媒体で発行している「さかい利品の杜学芸だより」と合わせて多様な情報発信を行いますので、引き続きよろしくお願いたします。本号編集担当:海邊博史(さかい利品の杜学芸員)